
妖幻抄 8章

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖幻抄 8章

【Zマーク】

Z0998A

【作者名】

維月十夜

【あらすじ】

明は、時折感じる不調に悩まされていた。『風邪を、ひいてしまつたのかも知れないな』明は、自嘲気味に呟いた。『妖幻抄 8章

』

海を越えて（前書き）

いつも、維月です。

さて、やっと旅らしくなつてきました（笑）

明が、不調を訴えています、原因は後々分かりますので、期待を。

海を越えて

頭が、痛い。

それに、時折目もかすむ。

風邪、だろうか？

いや、そんなはずはない。

今まで、一度も雨には当たっていない。

明は、一頻りに田を擦つた。

「……る、明? どうした

「え! ?

呼ばれていたことに、氣づかなかつた明は、慌てて氷雨の方をふり向いた。

「お前、なんか顔色悪くないか? 少し、休もうか?」

「え、いや……大丈夫だが、寝不足なんだうつ、きっと

明が苦笑ぎみに言つと、氷雨も『実は俺も何だ』と笑つた。

「キュー ルルル……」

先を歩いているミミが、申し訳なさそうに啼いた。

「別に、お前を責めちゃいないんだぜ? ただ、寝不足だつて言つただけなんだ」

「氷雨、それ、フォローになつてないぞ」

立場のなくなつたミミは、明の上着ポケットに、潜り込んでしまつた。

ポケットから顔を覗かせ、弱々しく鼻を鳴らすミミを、明は指先で撫でてやる。

「お前のせいじゃないよ、気にするな

村を出で、幾月かが過ぎていた。

始めのうちは数えていたが、それは、やがてすぐに、意味をなくした。

山中を歩くうち、一人は清流を見つけ、そこで一息つくことにした。

「つ冷たい！」「う、ヨリ跳ねるんじゃなーっ、ほり、氷雨のとこ行つてこい」

「なつ、なんでだよ！冷てえ、こらやめうつ…」

そう言つているが、げらげらと笑いながらなので、全く説得力がない。

明は、ぶり返してきた頭痛に、一瞬顔を顰めたが、氣取られないよう、すぐに、表情を戻した。

「もう、早く行くぞ。日が暮れる前に山下りねえと

「うん、おいで…ヨリ」

ヨリは、身震いして水滴を払うと、明の頭に乗つた。頭が、痛い。

さつきよりも、痛みが増しているような気がする。

視界が、ぼやける。

やはり、風邪なのだろうか？

そういうえば、熱っぽい気も、しないではない。

一方氷雨も、明の異変に、思いを巡らせていた。

（あの時…明の気配が変わった、あれは…間違いなく、本物の妖の気配だった。おふくろの血のせいいか？けど田中、姿は半魔のままだ、どうなつてんだ？）

一人は山を下り、砂塵の舞う、荒野を歩いていた。

すでに陽は翳り、あたりは、薄暗くなつていた。

「ん、血の匂いだ…近い」

氷雨は風の中に、濃厚な血の匂いを感じて、鼻の頭にしわを寄せた。

「氷雨！あれ見ろ、誰か倒れてるぞ！」

氷雨は、顔を上げる。

明が指をさした先には、人影が、横たわっているのが見えた。

「あれか、行くぞ明つ」

『スニーカー』

瑰
かい（前書き）

旅の途中、一行は傷ついた老人を助けたが、その老人は、氷魚の祖父だということが分かつて！？

瑰 かい

横たわっていたのは、紅い髪をした、初老の男だった。

「おい、大丈夫か！じいさんっ、しつかりしろ！」

氷雨はおそるおそる、初老の男の肩を揺さぶった。

「あ…ああ、すまないのぉ、お若いの、いたた…」

男は、腰をそすりながら、立ち上がった。

「いやいや、村に戻る途中に、追い剥ぎに会つてな…困つておつたんじや！」

男の腕や足には、斬り傷がついており、傷口からは血が流れていた。
「じいさん、ひどい傷だ…斬りつけられたのか？！待つてて、いま血止め草を出すから」

腰の巾着を探る明を見た、男の表情が固まった。

「十六夜…！お前、十六夜か！？生きておつたんだな？はあ…よかつた、さあ、早く村に戻るべ」

手を握る、男の力は強い。

明は、ちらりと、困惑気味に、氷雨の方を見た。

「おいおい、じいさん…ヒト違いしてねえか？こいつ、女だぞ」

「待つて、氷雨。十六夜は、父さんの名前だが、じいさん…父さんを知つているの？」

「知つているともと、なにせ、十六夜は、儂の息子なんじやから」

「え…ええ！？」

いきなりの事実判明に、明は顔を白黒させる。

「そうか、あんたが十六夜の娘か…手当てまでして貰つて、ありがとうなあ、それにしても、あ奴そつくりじやのう」

驚く明をよそに、男は明の手を握り、うんうんと頷きながら再会を喜んでいた。

「じいさんが、明の祖父殿！？」

氷雨は、狼狽する。

「明といつのか、儂は瑰といつ、少年は、名をなんといつのだ？」

「お、俺は氷雨だ」

「そつか、助けていただいて、すまないな…そなたらせ、この先に行く宛はあるのかね？」

「いや、特には…ない、よな？」

氷雨は、明に同意を求めた。

「う、うん

「では、どうじゅう…儂に、戻返しを、させてはくれんかの？」

「恩、がえし？」

明は、ふにつゝと首を傾げた。

「ああ。儂の村に、招待したいと思つてな」

「構わねえけど、その村、どの辺にあるんだ？」

氷雨が尋ねると、瑰は『よくぞ聞いてくれた』といわんばかりに、微笑みながら説明をし始めた。

「うむ、それ…向こうに海が見えるじゃあ、あの向こう、儂の村がある。」

「なあ氷雨、海つてなんだ？」

「いや、知らねえけど…」

「海はな、すべての生命の源じやよ、いま命ある者はみな、そこから来たと言われてある」

「へええ、物知りだな、じいさん」

瑰は、何も応えない代わりに、嬉しそうに笑った。

「しつかし、どうやつてこの海を越えるかだよなあ…ん？」

くいきい、ヒズボンの裾を引っ張られ、見てみるとミミがいた。

「なんだよチビ、腹でもへつたのか？明に団栗でも貰つてこい」

「ほつ、鳥兎とは好都合な」

瑰が、ミミの傍に屈むと、ミミは困ったよつて、キイと啼いた。

「瑰…ミミが、どうしたの？」

問い合わせる、明の手の中から体を捩つて、ミミが抜け出した。

「ん？鳥兎は空を飛べるんじやよ、知らなかつたか」

明は、ミリの方を見る。

当のミリは、猫じゃらしがよく似た、金狗尾草きんくいのりにじやれたりしている。

とても、そんな風には見えない。

「そりは見えないけど…」

「つーむ…では、高所から落としてみなさい、本性が現れるから」

少し間をおいて、瑰は言つ。

明は、間が空いたのに疑問を持ったが、この際、考えないことにしてた。

「明、俺がやろうか?」

暇そうにしていた氷雨が、明に抱きついた。

「つづん、いい…下手に触ると、危険なんだ」

明は、彼の手の甲を握り、べたつく氷雨を、ベリッと剥がして、肩を放つた。

油断も隙も、あつたものではない。

「つてえ、いいよ、俺がやつてやる」

抓られた手の甲を、フーフーと吹きながら、氷雨はミリの傍に詠む。

「や、やめた方が…」

明が止めようとした瞬間、事は起つた。

「いてつ、いててつ！ いてつ、て…やめろアホつ！ 助けてくれえ明

つ

勢いよく、耳を振りまわすミリ。

いわゆる、往復ビンタである。

ミリは、鼻息荒く、再度、耳を氷雨に叩きつけた。

「ほら、だから言つただろつ…ミリ、おいで」

キイ、と啼いて、肩に飛び乗り、何事もなかつたかのようこ、元氣に欠伸をする。

「てんめえ

依怙龜頸えこひこいきじゃねえかよつ、このつー…」

氷雨の手を、すり抜けて着地し、ミリは、毛皮を逆立てて威嚇する。眩暈を感じた明は、一人の仲裁に入つていぐ。

「その様子では、**ヒツヤリ**、手なづかるしかあるまこ……」

瑰は一本、手近な金狗尾草を手折り、**ミハ**の田の前に翳した。

「ほれほれ、樂しげか、ん？」

猫じゅらしにて、じゃれ始める**ミハ**、茫然となる氷雨。

「なつ……俺の苦労は、何だつたんだよ。ま、いいケドやあ」

「カワイイ……ミハ、嬉しそうだ。なあ氷雨」

「あ、ああ」

内心、どこがだよ、と毒づくが、樂しそうな明を見て、自然に口があ
動いていた。

「ほう、これが欲しいか……ならば、取つてこい！」

瑰が、猫じゅらし、もとい金狗尾草を放り投げた瞬間、**ミハ**が変化
した。

黒い巨体が、宙を舞つ。

空中を飛行しながら、素早く獲物を銜えた。

「す、じ、い、飛んだ！」

「な、飛んだだろう」

はしゃぐ明に、瑰は、嬉しそうに笑う。

「おいで、ミハ……お前、飛べるんだね」

降り立つた**ミハ**は、喉を鳴らして、明に甘えた。

「お前、あたし達を乗せてくれる？あの、海の向こうへ
くおん、と啼いて、ミハはしきりに尾を振る。
どうやら、承諾してくれたようだ。

「ありがと、ミハ……いい子だね」

瑰 かい (後書き)

いつも、維月です。〈br〉明、不調がついでペークを迎えており
ます。〈br〉氷雨は、相変わらず、三三と仲が悪いですね(汗)
〈br〉三三の、以外にカワイイ(?)一面が、〈br〉まあ、樂
しんで、読んでくださいませ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0998a/>

妖幻抄 8章

2010年10月9日23時57分発行